

多喜二の視点から見た〈身体〉〈地域〉〈教育〉 —2008年オックスフォード小林多喜二記念シンポジウム論文集—



オックスフォード
小林多喜二記念
シンポジウム論文集
編集委員会
(代表・荻野富士夫) 編
小樽商科大学出版会
2009.2

2008年は小林多喜二の「蟹工船」がブームとなったことは記憶に新しいであろう。不況のもとで企業は新採用を抑え、いつでも解雇できる派遣社員などで不足を補ってきた。中高年層のリストラは年間3万人にも及び自殺者を生む一因となり、若年者は不安定な採用条件で就業し、将来へのビジョンも抱けず低収入にあえいでいる。それでもこの不満をストライキなどでアピールする機会もない。なぜだろう? 『蟹工船』では労働者が連帯を組んで立ちあがるさまが描かれている。一度は失敗に終わるが、最後には再び立ち上がるのだ。

小林多喜二は2003年に生誕100年、没後70年を迎えた。これを機に、小林多喜二国際シンポジウムを各国で開催すべく準備が進められてきた。本書は2008年9月にオックスフォードで開催

された国際シンポジウムの論文集である。副題にある項目の枠組みの中で、各国からの発表者が実に多様な視点で多喜二の作品を論じた。会場の熱気は本書にも十分に伝えられている。集団を忌避し、個人で過ごす時間が多くなっているように見える現在においても、国境を越えて小林多喜二の名のもとでこれほど熱く語り合うことができたことは、一つの希望に思える。

所収拙論は「拷問における身体の収奪—小林多喜二「一九二八・三・一五」と村上春樹「貧乏な叔母さんの話」」である。発表時間は20分間。舌足らずな論文だが、お目通し戴ければ嬉しい。

2階書庫 [910.268 || Ko12]

山崎眞紀子(法学部教授)



日本を創った思想家たち



鷲田小彌太 著
PHP研究所
2009.6

空海、世阿彌、仁斎、諭吉、遼太郎……たちの哲学伝。大いなる抱負をもって「日本人の哲学」(全8部=8巻)の執筆をはじめた。特大の理由を三つあげれば、一つは「哲学」のイメージの転換である。司馬遼太郎に倣って言えば、哲学(文学)は何をどのように書いてもよい、「哲学」プロパーの手になる著作の「貧血」状態を脱するためだ。転換の根本イメージは、プラトンからはじまる西洋哲学、孔子からはじまるチャイナ哲学、チャイナ哲学を再興した江戸期の日本哲学の豊かな富を獲得内包することである。二つは豊かな日本の歴史が可能にした豊かな哲学を構成し展開してみたい。日本と日本の哲学の「発見」である。三つに、良きにつけ悪きにつけ

マルクス主義に汚染された哲学思想の取り扱い理解を払拭するためである。

いずれも厄介な課題だが、まずはトータルなイメージを掴むためにウォーミングアップをする必要があった。それが本書である。しかし通例の哲学史・哲学者伝とは異なるものの、やはりまだまだ哲学っぽい。たしかに形式は日本の哲学者事典と見える。だが内容は簡潔でも、著者独特の発見と読解を含ませてある。利用されたい。

第2開架閲覧室 [121.02 || W42]

鷲田小彌太(経済学部教授)